水上勉全集

12

水上勉全集　第十二巻

定価二四〇〇円

昭和五十一年十一月二十日初版
昭和五十七年十月十日再版

著　者　水上　勉
発行者　高梨　茂
印刷者　青木　勇
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七六

目次

好色 3
男色 129
わが六道の闇夜 289
破戒坊主の感想 421
その人の涙 481
鯉の話 507
あとがき 525

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

好

色

一

「黒ずんでみえる凹んだ臍と、心もちふくらみをもった腹の皮が、大きく波打つのを彼は見た。女は口をあけていた。欠けた虫喰いの糸切歯がのぞいた。彼は手を女の背にまわし、力を加えていった。はじめは肩胛骨のとび出たあたりに廻していたのを、しずかに背骨をつたって下方にずらせた。汗ばんだ胴はかなりくびれているのに、腹が波打つたびにふくらみを増すので、女はずん胴のようにみえる。不意に彼は小さいころ夜店で見た風船を連想した。唇をかさねると、一方の手をさらに女の下にずらせた。まさぐった。やわらかい恥毛が指の腹をなでた。女は口を大きくあけた……と彼は瞬間、まったく、それは突然ではあったが、窓の外を疾走してゆく救急車のサイレンを聞いた。いや、それは錯覚であった。救急車など走ってはいなかった。彼の口から、急に、まったく偶発的にとび出たサイレンの声色だった……女は笑った。笑ったとたんに、急に二人はうちとけていった……垣根がとれ、二人をそれまで縛っていた空気がなごみ、彼は大胆に女の襞に入った」

鬼頭宗市の小説「傾斜」の一節である。私は、この「傾斜」を純文学雑誌「新風」の創作特集

号でよんでいた。

二

縞のワイシャツに濃緑の蝶ネクタイを締め、真夏だというのに、厚ぼったいグレイのズボンにウーステッドの薄紺杉綾の背ぬきを着ている恰好は、どうみても田舎者としか思えなかった。私は洋服屋であるから、着ているものの安っぽさは遠眼にもわかった。どこかの既製服を買ったのだろう、妙にけばけばしい色調の合着だった。ワイシャツの襟先をとがらせたのも清潔さをみせようとしているらしいが、かえって暑苦しく野暮ったいのだった。ところが、鬼頭宗市は、心もち胸を張り、こってりぬったポマードの匂いを発散させ、くわいのような丸顔をのぞかせると、「こんにちは、はじめまして、鬼頭宗市です。小説を書いています」と早口に自己紹介した。せっかちに胸ポケットからハンカチをとり出し、イヤにつるつるした顔のあたりをふいた。冷房設備のない、西陽のさす私と圭子の間借りの部屋は、それでなくても、私の商売である洋服が積み重ねてあるので、ムンムンするほど暑いのだった。鬼頭は上着をぬぐでもなく、二つある前ボタンをきっちりかけ直しながら、

「小説を書くのが本職なのですが、アルバイトに高校の教師もしています。市川の定時制高校で、夜だけ英語を教えているんです。圭子さんとは、九州時代からの知りあいで、すでにお聞きとは思いますが、(と鬼頭は、この時、麦茶をさし出した圭子の横顔を、心もち、気やすげに、チラと見て)圭子さんの友だちの姉が私の妻なのです。私は八重町のお寺へよくゆきました。圭子さん

の実家は、正林寺という大きな寺でしてね。私の妻は、山門の前の薬局の娘です……圭子さんも、女学校時分はよく薬局にあそびにきていました。正林寺には大きな欅の林があって、墓地も広く、とくに墓地へゆく白い砂利道がよかった……あすこは、ぼくらのデイトにもってこいの道で、よく、夜おそくまで、(とこの時、鬼頭はにやりと奇妙な笑い顔をみせた) ヒメコとあそびましたよ。圭子さんがこんど、女子体操大学を出て、あんたと結婚なさったときいて……いちど、会いたいなァと思っていたンです。じつは洋服を売っていらっしゃるときいて興味もあったのです、今日、とつぜん、うかがったのは、私の妻に買ってやる洋服がないかと思いましたもんですからね……前もって、電話をしてくれればよかったんですが……圭子さんにはそのことは葉書で一度お願いしておきましたので、東京へ出たついでに前ぶれもなく来てしまいました……お忙しいところをどうも……」

椅子にすわるなり、鬼頭宗市はそういった。物をいう時に口をつき出す癖がある。奇妙な顔だな、と私は思った。それは額が狭いためだった。生え際が一直線に眉と平行し、固い髪が密生していた。のちにわかったのであるが、生え際が一直線にみえたのは、鬼頭が寝る前に必ず一本ずつ額の毛を抜くのを日課にしているせいであった。額の狭さが気になるとみえ、一本でも毛をぬきたいという気持はわかるが、かえって、鬘をかぶったように、生え際を直線に揃えたところが、その狭さを誇張していた。耳もちょっと変っていて、うすい耳が、左右にピンと広がっている。強度の近視らしく、褐色の縁の度のきつい眼鏡をかけていた。レンズを通して、濁った茶褐色の眼がとび出していた。実際は出眼ではないのだが、眼鏡のせいである。鼻すじは尋常だが、小鼻

がひどくふくらみ、両方から「笑い皺」とよぶ、太い二本の皺が口角にかけて深く刻まれていた。で、笑ってもいないのに、薄笑いをうかべているようであり、しかも心もち下唇が受けているので、いっそう、その笑いは相手を小馬鹿にしたようにみえる。イヤな顔だと思ったのは、その笑い皺のせいだったろう。圭子は、鬼頭の表情に眺め入っている私に強い視線をあてていた。圭子は早くからの知り合いだから、私ほど、この男の表情に違和感をおぼえないのだろうか。鬼頭は私たちにかまわず喋りつづけた。

「なに……教師ったって、ロクな教師じゃありませんよ。ぼくもアルバイトのつもりではじめたンですからね……小説の方がどうも売れないもんだから」

と鬼頭は次第にぞんざいな物言いになってにやりと笑った。よく喋る男だと私は思った。

私はこの男のことは、妻の圭子からきいていた。いや、圭子からきく前に、私は彼の小説を読んでいたから、名前は知っている。圭子のうまれた寺は、鬼頭のいうとおり大分県の八重町の正林寺だが、その門前町にある薬局に高校の同級生がいて、その娘と二人で上京し、一緒に体操大学を卒業したのだった。その娘の姉ヒメコが好いた相手がこの新進作家だというのである。千葉県の高校教師をしながら、小説を書いているのだと、圭子は私と同棲して間もなく、自分の知友の話をしたついでにいった。私はなにげなくきいていたつもりだが、鬼頭宗市という名をすでに知っていたので、びっくりした。というのは、私も今でこそ三流の洋服屋であるが、昔は文学青年で、小説も書いたりした。私は才能がないことがわかったので洋服屋に専念したのである。既製服の月賦販売であった。資本のない私は、神田岩本町の問屋から、毎日、十二、三着の服を借

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

りて、それをオートバイの尻に積み、会社や工場へ売りにいっていた。売れなければ、それを夕方、問屋に返し、また翌日に新しく借りて売り歩くという、ブローカーに毛の生えたような月賦販売業者だった。小説好きな私は、洋服を売りながらも、純文学雑誌の「新風」や「群狼」を時どき店頭で立ち読みするぐらいのヒマはあった。昔日の文学青年の名残りといえた。鬼頭宗市という新人作家を知ったのも、この立ち読みである。かつて文学青年の頃に、一度でもいいから掲載してほしいと夢みた雑誌に、堂々と創作特集と銘うたれて、鬼頭は著名作家たちのなかに名を連ね、百枚近い短篇を発表していた。私は羨ましかった。

冒頭に掲げたのは、その時の作品「傾斜」の一節である。鬼頭の小説には、妙に感覚的なところがあり、比喩の面白さがあり、きめもこまかい。描写力もたしかであった。たとえば、題もストーリーもわすれたけれど、ある失恋大学生がひとり寝する夜の心理描写に、うとうとしながら玄関の下駄箱の中を連想する場面がある。青年の頭に入った下駄箱の模様は突飛ではあったが、何ともいえない青年の空虚感を出すのに成功していた。主人公は下駄箱の中の両親や妹たちの靴や、下駄や草履の位置をはっきりと連想してみるのだが、それは失恋学生としてはたしかにそうであるようにみえ、失恋のために眠れないですごす姿がいかにも鮮烈な印象であった。鬼頭は女に興味があるらしく、性描写が多かった。とくに、女の仕種や物言いなどについて、微細にその模様を書く特徴がある。私には正直いって小説の価値判断を云々する才能などはない。しかしこの新人にはなんとなく注目していた。というのは、鬼頭の作品が、ふつうの新人とくらべてずば抜けていたというのではなく、扱っている主題が、いつも情事だったからかもしれない。書くも

のは、好んで大学生が主人公で、ありふれた情事ながら、心理描写に妙に光ったところがあった。
私は鬼頭宗市という男を最初にみた時、そういう小説を書く作者としての想像とまったく相違しているのに驚いた。これはまた野暮ったくて、田舎くさい男ではないか。私がだまって観察していると、鬼頭は鼻皺をせわしなく動かして、
「あなたは小説を好きですか」
ときいた。私は圭子と同棲して間もなかったし、むかし、文学青年であったことなど、まだ、圭子にいっていなかった。私は圭子の眼を意識しながら、
「好きです」
と答えた。
「むかし書いたこともあるんです。でも、とても自分には出来ない芸当なので、もう足を洗ってしまいました。純文学はむずかしいですね。私には、大衆小説すら書く才能がないことがはっきりわかったんです。中学校しか出ていない私は文章も下手だし、語彙も少いし比喩もはたらかない。外国の小説なんかもわからない。もちろん語学はダメ。評論なんかもむずかしくて理解できません。で、洋服屋に転業してしまったんです……正直、あなたの小説を読ませてもらって、比喩や連想の豊かさに驚きましたよ。それに、あなたの小説はモダンですね」
と私はすこしお世辞も入っているかな、と思いながらいった。すると、鬼頭宗市はにこにこして、私がすでに彼の小説を何篇か読んでいたことに気をよくして膝をのりだした。私は、鬼頭が洋服を買いにきてくれたのだから、早く、品物を見せてやらねばならないと思っていたのに、つい、

小説の話に足をとられ、われにもなく、むかしの文学の虫がむくむくと頭をもたげて、さらに余計なことをいった。

「心理描写はたいへん得意のようですが、しかし、あんなふうに女の肌や手足の動きを微細に描写してゆかれると、肝腎のムードというか、匂いというか、そういったものが逃げてゆきはしませんか。あなたは男女の交渉がたいへんお好きなようです……じつは私も人一倍エロは好きなんですよ……が、あなたの文章は一見、性を書いているようにみえても、性でないような気もします。はっきりいえませんが、……性の臭気が欠けているのですね。行為や、肉体の風景が微細に書かれてはいても、分泌物の匂いがしてこない。これは、すこし酷な意見かもしれませんが、大事なことだと思うんです。あなたの文章が金属的で、肉体的ではないような気がするんですよ。この点を考えてみられてはどうですか。すると、人間が動いてきて、性も迫真性が出ると思いますがね」

鬼頭宗市の眼が炯(ひか)ってきた。はじめは心外そうにみていたのが、次第に異様な輝きをましてきた。

「な、なるほど……匂い……匂い」

と彼は口の中でつぶやくようにいった。

「あんたは、いま、たいへんなことをいっている。とても洋服屋さんには思えない。あんたは、たいへんな批評家だ……」

と感心したように口走った。その言葉には素直なひびきが出ていて、私はふと好意を感じた。率

直な意見を述べたまでだが、しかし批評家といわれては苦笑せざるを得なかった。冒頭に掲げた「傾斜」の一節を読んでみても、匂いがないのだった。女が口をあけた時にのぞく糸切歯は、欠けた虫喰いである。男は何度も唇を重ねるのだが、そこには女の口臭もあろう、欠けた虫喰いの糸切歯は黄色くなって歯糞の匂いもしただろう、極端にいえば、そういう人間くさいあわれな姿を見逃がして、どことなくきれいごとにしている。私はさらにそのようなことをいってみたく思ったが、しかし、口の中で止めたのだった。私は十年ほど前に、本郷森川町に住む私小説の大家U氏の玄関番みたいなことまでして、文学、文学と毎日のように唱えながら生きていた。一冊の単行本まで出したこともあったのだが、そんなことをいま、商売のお客である鬼頭の前でいう必要もないのであった。私は洋服屋に専念している。小説家になりたいなどという夢はすでになく、小説のことも忘れ去ったつもりだった。それに、いま鬼頭のたずねてきた私の狭い六畳には、昨日、問屋から運んだ冬春物の出物がいっぱい積まれている。私と圭子はそれらにいちいちエフをつけ、値段表をつけ、明後日の問屋の棚下しの即売会に運ばなければならなかった。伝票整理などの仕事に追いまくられていた。文学の話などしていては、三文のトクにもならない。小説の話に深入りしてはいけないと、私は自制していた。ところが、鬼頭宗市は、長尻をきめこむつもりらしく、服を分けてくれと頼みにきた用件も忘れて、小説の話に夢中になるのであった。私も根が小説好きなものだから、興奮すると、時間も忘れて熱中する危険がある。あとで頭が痛くなることもしばしばだった。私には文学論は禁物であり、鬼頭の話に深入りしないように、なるべく聴き手にまわっていた。と、鬼頭はようやく、いいにくそうに、

「じつは、女房の洋服をほしいんです」
といった。
「月掛にしてもらわないと、お支払いもできないのです。月給日にはきちんともってきますから……冬物のオーバーとスーツがあったらわけてもらえませんか」
私は即座に、高校教師なら月々の給料も確実であろうから、支払いがとどこおることはないだろうと踏んだ。早速、圭子に、風呂敷包みから十点あまりの女物をとり出させ、その中からグレイのモヘアのオーバーと黒ウーステッド無地のスーツをみせたのである。
「これなんか、どうでしょう、奥さんの柄は、拝見していないからわかりませんが……黒やグレイは飽きがきませんね」
と私はいってすすめた。鬼頭宗市は自分の服装の色調も忘れて、即座に私のすすめた品物に賛意を表し、「まったくです、飽きがこない。これはいい」といい、寸法は着てみて直してもらえるかと聞いた。問屋へ持ってゆけば修繕はきく仕組になっている旨を圭子がいうと、鬼頭はにこにこして、一万二千円の買物を鄭重に包装紙にくるませた。私は鬼頭宗市が、女房のために、真夏に冬物の買物をするのを楽しくながめることが出来た。高校教師の身ではそうそう細君に洋服を買いあたえることは出来ない。おそらく、この男は細君を大切にしているのだろうと思った。鬼頭は部屋を出しなに、
「それでは、失礼します。こんど『新風』に六十枚の短篇を書きました。恒例の新人特集なのです。五日には出ると思いますから、どうか、よんでみて下さい。題名は『女館』というんですが、

つまり、オンナのヤカタです」
といった。私は、鬼頭が小説のことばかり考えて生きているのだなと思った。鬼頭が帰ったあと、この時まで、鬼頭と私との会話をきくだけで殆どだまっていた圭子は、洋服をしまいながら、ぽつりと私にいった。
「あの人、ちょっと変だったでしょ。九州にいる時から、変なのよ。ヒメコさんもね、時々、別れるんだといっては八重へ帰ってましたよ。あの人ね、あんな顔してて、浮気ばっかりしてるの。それがね、自分の周囲の女のひとに手をつけるので、癖が悪いのよ。あたしたちの友だちのトシコ、マツコ、みんな、あの人と一度か二度は寝てるのよ……とっても手が早いの」
トシコ、マツコというのはよく圭子の話題にのぼる体操大学時代の同級生で、私の家へも来たことがある。二人とも顔見知りだった。その女たちが、あのポマードをぬりたくったくわい顔の鬼頭と寝ていたのかと思うと、私は呆気にとられた。はじめて、鬼頭宗市の姿が私の頭に大きく位置をしめたのだった。
「つまり、女たらしか」
「そうね、女たらしといってよいのか……どうか。ドンファンだったら、それはそれで、もてるのが普通なのよね……でも、あの人、決してもてはいないのよ。トシコだって、マツコだって……嫌いだわっていってるし……でも、それで二人とも寝てしまってるのね……どこか憎めない子供みたいなところがあるのよ、あの人」
「そういうものかね」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo